

令和6年12月2日

習志野市長  
宮本泰介殿

会派 明日の習志野  
代表 大宮こうた

令和8年度を計画始期とする新たな基本構想及び基本計画について、別紙のとおり提言書を提出します。

同構想・計画の策定において本提言書の内容をご参照いただき、前向きなまちづくりを推進していただくようお願いいたします。

以上

別紙1：提言書（要旨）  
別紙2：提言書（全文）  
別紙3：提言イメージ図

会派・明日の習志野

次期基本構想・計画に対する提言（要旨）  
～みんなで豊かな未来を拓く、ワクワクする習志野へ～

**1. 現状認識**

- (1) 世界：不安定で見通しの立たない時代（VUCA）、地球「沸騰」化による異常気象の増大、ポスト SDGs、人口増加率の鈍化（2080 年代に世界人口はピーク到達）
- (2) 日本：人口減少・超高齢社会に対する経済社会モデルの未構築、国際的地位の低下（経済力、人口、技術力等）、将来不安の広がり
- (3) 習志野市：潜在性の大きさ（人口減少の回避、健全な財政、羽田空港の機能強化や京葉線沿線開発の動き、海辺の開発余地、文教住宅都市憲章、進取の気風）

**2. ビジョン**

「みんなで豊かな未来を拓く、ワクワクする習志野へ」

- (1) 多様かつ新しい個性で、国内外から「選ばれる」まち
- (2) 潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち
- (3) 将来不安を払しょくする、志とチャレンジがあふれるまち

**3. 重点政策**

- (1) 多様かつ新しい個性で、国内外から「選ばれる」まち
  - ① 過去の実績に加えて、教育と文化の新しい形を創り出す文教住宅都市
  - ② 歴史と伝統を活かしつつ、新たな伝統となる価値を生み出していく社会
  - ③ 「ごちゃまぜ」の住民参加型で、持続可能で新しい「公共」の創出
- (2) 潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち
  - ① 全世代が支え合いながら、超高齢社会を楽しむまち
  - ② 自然を「守る」だけでなく、新たに生み出して共存する環境
  - ③ 羽田空港へのアクセスや京葉線沿線開発を活かす、「新習志野」の実現
- (3) 将来不安を払しょくする、志とチャレンジがあふれるまち
  - ① 「市民協働」ではなく、「市民主導」による住民自治
  - ② 社会実験を展開しながらアジャイルに変化する、柔軟なまちづくり
  - ③ ピンチ（将来不安）をチャンス（好機）にするプラットフォームとしての行政

**4. 重点事業**

- (1) 多様かつ新しい個性で、「選ばれる」まち
  - ① 日本式教育によるインターナショナルスクールの設置、義務教育の真

の無償化、小学校のコミュニティ・スクール化、特別支援学校中学部・高等部の設立、日常に文化の薫る「みち」・まちづくり、外国人定住促進策を含む多様な共生社会の推進

- ② 教育・医療・介護・防災等、あらゆる分野で「習志野発」の取組を創造し発信、新しい価値を創造することを重視する行政
  - ③ 市内にある3大学の個性を活かした連携事業の推進、若者による創業・スタートアップ支援、社会起業家の育成
  - ④ 国籍・年齢・性別・障がい有無・官民等の垣根を越えて「ごちゃまぜ」で交流する公共施設の設置、「直営か民間委託か」の二択ではない新しい「公共」サービス手法の模索と実践
- (2) 潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち
- ① 福祉基準の見直し（高齢者の定義変更、「年齢」から「困窮状態」に基準を変更）、新しい地域活動（プレーパーク、マルシェ、子ども食堂、無料学習塾等）への支援の抜本的拡充、スポーツ×健康づくり×まちづくりの実践
  - ② ハミングロードの再活性化
  - ③ 親水性の促進（茜浜・芝園の海辺、谷津干潟、菊田川）により「生きがいと学び」の場となる水辺の創造
  - ④ 新習志野駅周辺の「第二のまちびらき」（駅南北を一体的に捉えた再開発、駅周辺への集合住宅の建設、かわまちづくり、千葉工大と連携したスタートアップ支援（宇宙・ロボット産業等）、駅周辺における新交通手段の実証実験等）
- (3) 将来不安を払しょくする、志とチャレンジのあふれるまち
- ① まちづくり会議の抜本的な拡充（一定の予算権限の委譲、市民公募型・専任職員（まちづくりコーディネーター）の配置による熟議の深化等）、市民参加型事業の抜本的拡充、熟議型民主主義手法の活用
  - ② 市民活動を支援する中間支援組織の設立、「シンクタンク・ならしの」の設立、市役所職員の専門性を見直しと強化
  - ③ 市民・企業提案型の社会実験事業の展開、試行錯誤を許容する行政文化の定着、新規条例の制定時における改正検討時期の明文化（常に見直す姿勢の制度化）
  - ④ 都市計画の全面的な見直し（住工分離地域の見直し等）、京成各駅の駅前空間の充実と沿線自治体との連携

以上

会派・明日の習志野

## 次期基本構想・計画に対する提言

### ～みんなで豊かな未来を拓く、ワクワクする習志野へ～

#### 0. はじめに

習志野市が現在策定している新たな基本構想・基本計画（以下「次期構想・計画」）は、今まで策定されてきたものよりも極めて重要となる。なぜなら、世界は不安定かつ予測困難な状況であり、日本は本格的な人口減少・超高齢社会となる時代においては、まちづくりの先行きがますます見通せなくなるからである。先行きが不透明な時代においては「こうすればまちづくりはうまくいく」といった成功モデルはない。成功モデルがない中で、各自治体はその個性と強みを活かして自ら未来を切り拓いていくために、明確なビジョンが必要不可欠である。そのビジョンは、習志野市では文教住宅都市憲章であるが、時代の変化に即したビジョンは、次期構想・計画で示されるべきものである。

また、昭和の価値観や前例踏襲によるまちづくりでは、経済社会の発展だけでなく、その維持すらも難しくなっていることは、過去30年以上の日本社会の停滞を省みれば明らかである。国内外ともに見通しが困難となっている時代において、過去の延長線ではなく、強い志とチャレンジ精神によって、自ら時代を切り拓く、豊かなまちづくりを自立的に行っていくことが重要である。

逆に言えば、個性と強みを活かして自立的なまちづくりができない自治体では、市民の生活は維持されず、市外へ人口が流出し、その自治体は消滅していく可能性が高い。

このような問題意識に基づいて、次期構想・計画に対する前向きな提言を行う。まず、世界、日本、習志野市の現状について整理し、そのうえで、豊かな未来を自ら拓くために、ビジョン、重点政策、重点事業を提案する。

#### 1. 現状

##### (1) 世界

2010年前後から米国において、混沌とする時代を表現する言葉として「VUCA<sup>1</sup>（不確実な状態）」という言葉が用いられた。そして、今、VUCAが極まった時代といえる。米国が「米国第一主義」を掲げ、中国は軍事的に台頭

---

<sup>1</sup> VUCAとは、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字を使った造語。元々は、1990年代後半に、米軍で、冷戦が終結して国際情勢が複雑化し、軍事戦略を立てることが難しくなった状態を示す用語。

し、安保理常任理事国であるロシアが隣国を堂々と侵略する、イスラエルによる無差別と言える殺戮を止められない等、国際秩序が大きく揺らいでいる。経済においても、米中の経済対立はデカップリング<sup>2</sup>が進んでいるという見立てがある状態であり、自由で開かれた国際貿易体制が弱体化している。自然環境については、異常気象が常態化し、地球温暖化は「地球沸騰化」と言われる状況になってきている。

このような状況において、国際社会は、2030年までにSDGs（持続可能な開発目標）の達成を目指しているが、国連はこのままでは達成できないと既に表明している<sup>3</sup>。「ポストSDGs」という言葉が使われているように、2030年以降の国際的な開発枠組みが議論され始めている。

一方、政治、経済、社会、環境等あらゆる面に影響を与える人口という要素も新たな局面を迎えている。既に先進国の多くが人口減少時代に突入しているが、世界人口全体も2080年代にピークを迎え、人類史上初となる、世界全体の人口が継続的に減少していく時代となる見込み<sup>4</sup>である。

このような世界の現状と未来を一言でまとめると、「不安定で見通しが立たない」という状況である。この状況では、各国は、大国に依存する、発展の成功モデルを探す、ということではなく、流動的な国際情勢を見極めて国益を最大化する政策を臨機応変かつ迅速に実施することが求められている。

## （2）日本

不安定で見通しが立たない世界において、日本の現状は、問題の先送りを続けてきた結果、将来不安が最大化し、未来への希望が見えない。出生数は毎年「過去最低」を更新し、日本発の新規ビジネスモデルは生まれてこない。日本の国力は急速に落ちてきており、国際的地位も低下している。

この現状をもたらした原因は、バブル経済崩壊後、新しい経済社会モデルを構築できなかったことである。昭和の価値観や手法が通用しないことを感じながらも、経済社会の抜本的な変革をせず、政府は財政出動を繰り返してきた。しかし、経済は停滞し、「安いニッポン」と数年前から言われるようになってきた。円安に加えて国内の労働力が国際市場で相対的に安くなり、製造業における生産ラインが国内回帰し始めてきている状況である。

日本における重要な課題は、人口減少・超高齢社会である。日本人の人口は2023年から2024年の1年間で86万1,237人の減少となった。習志野市の人口の約5倍の人口が1年間で日本から減ったのである。そして、高齢化は進み、65歳以上の人口割合は29.1%、75歳以上も16.1%<sup>5</sup>となっている。

<sup>2</sup> 二国間が経済的に連動せず、互いに影響を受けない状態にあること。

<sup>3</sup> 2024年6月28日、国連が「持続可能な開発目標（SDGs）報告」の最新レポート2024版を発表。このままではSDGsを達成することができないと、強い危機感を訴えた。

<sup>4</sup> 2024年7月11日、国連は、世界人口の推計を発表し、2080年代半ばにピークを迎えた後、今世紀中に減少に転じるという予測を明らかにした。

<sup>5</sup> 令和6年版高齢社会白書（内閣府、2024年11月5日21時15分、以下サイトをアクセス）

「高齢社会」の定義は65歳以上の高齢者の割合が「人口の14%」を超えた社会とあるが、日本は既に75歳以上の人口割合も14%を超えている。人口減少、高齢社会の傾向は今後も続き、2070年には総人口8,700万人、65歳以上の人口割合は38.7%となると推測されている<sup>6</sup>。このような人口減少・超高齢社会において、社会保障制度（年金、医療、介護等）、交通インフラ、教育制度等、経済社会モデルを現状からどのように変えていくべきか、明確で大局的な方針は未だ示されず、日本の政治、経済、社会は低迷し、漂流している。

このような現状において、日本社会には将来への不安が広がり、政治、経済、社会等、あらゆる分野に負の影響を与えている。この「将来不安」の払しょくこそが日本の最大の課題といえる。

### （3）習志野市

世界、日本の現状を踏まえて習志野市を俯瞰すると、「潜在性が大きく、今こそ果敢なチャレンジをする時」といえる。潜在性の土台と言える要素は人口動態である。習志野市の人口は、現在、175,179人（2024年10月31日時点）、高齢化率は23.3%（2020年<sup>7</sup>）という状況である。国全体の状況に比して高齢化率は低く、また、国の推計<sup>8</sup>によれば、2050年時点でも現在から人口は減らず（175,271人という推計）、また、高齢化率も31.7%に留まる。

つまり、国全体や県内の他市町村と比して、習志野市の人口は減らず、高齢化も深刻化しないという恵まれた見通しである。人口規模と高齢化は、市税等の収入面、扶助費等の支出面、双方に多大な影響を及ぼすため、この見通しは習志野市の有する相対的な強みといえる。

また、財政面では、2023年度決算で財政の健全化判断比率及び資金不足比率は全て健全段階であり、極端に慎重な財政運営が求められている状況ではない。公共施設の再生に要する将来費用等を考慮すれば、放漫な財政は避ける必要がある。しかし、前述した人口動態における相対的な強みを考慮し、必要なタイミングで将来への投資を適切に行うことを考える時である。

まちづくりにおいては、「奏の杜」の開発に続き、JR津田沼駅周辺の再開発、鷺沼の特定土地区画整理事業といった大規模な開発事業が進んでいる。今後も、総合教育センターの更新と複合化、埋立事業で形成された袖ヶ浦・秋津・香澄・茜浜・芝園地域の再活性化、新習志野駅周辺の再開発の可能

---

[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/html/zenbun/s1\\_1\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/html/zenbun/s1_1_1.html)

<sup>6</sup> 「日本の将来推計人口（令和5年推計）結果の概要」（国立社会保障・人口問題研究所、2024年11月5日21時22分に以下サイトをアクセス）

[https://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2023/pp2023\\_gaiyou.pdf](https://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2023/pp2023_gaiyou.pdf)

<sup>7</sup> 千葉県による統計資料、2024年11月9日20時58分、以下サイトをアクセス）

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kenzu/seikatsushuukan/documents/14narashino.pdf>

<sup>8</sup> 「日本の地域別将来推計人口（令和5（2023）年推計）」（国立社会保障・人口問題研究所、2023年12月22日公表資料）

性、海辺における清掃工場の建て替えや下水処理場の広域化、千葉県による高潮対策事業等、様々な新たな動きが視野に入っており、習志野市のまちづくりの躍動感が増してきている。

更に、習志野市は、全国的に環境問題に注目が集まる前に制定された文教住宅都市憲章、県内初の核兵器廃絶平和都市宣言や女性政策課の設置、干潟として日本初のラムサール条約登録（谷津干潟）、国に先駆けて実施したこども園事業等、進取の気風<sup>9</sup>があふれる街である。

習志野市の有する、人口動態における相対的な強み、健全な財政状況、躍動感の増しているまちづくり、進取の気風、これらを踏まえれば、不安定で見通しの立たない世界、そして、将来不安の漂う日本において、習志野市が目指す方向性は明らかである。それは、慎重な市政運営ではなく、自ら未来を切り拓いていくような積極的な市政である。具体的に言えば、人口動態における相対的な強みがあり、財政が健全な状況の間に、生産年齢人口や子育て世代、若者を呼び込み、または、定着させるような、前向きでワクワクするまちづくりを今こそ推進していくタイミングである。

習志野市は、個性と強み、そして潜在性があり、コンパクトにまとまっている街であり、積極的な市政運営によってスーパーボールのように未来へ大きく飛躍できる。

## 2. ビジョン

現状の分析を踏まえて、習志野市の個性と強みに基づいて、次期構想・計画では、次のビジョンを打ち出すことを提案する。

### 【ビジョン】みんなで豊かな未来を拓く、ワクワクする習志野へ

「みんなで」という言葉は、価値観が多様化している時代において、一人一人が自分の人生を楽しみつつも、まちづくりは市民全員で取り組むという意味合いである。「豊かな未来」という言葉に、縮小一辺倒ではなく、必要な将来投資はしっかりとしていくという決意を込めている。「拓く」という言葉に、不透明な時代において自立的な自治体経営をし、自ら時代を創っていく、という想いを込めている。「ワクワク」という言葉に、見通しの立たない時代を過剰に不安視するのではなく、様々なチャレンジをして新しい街を築いていけるチャンスという前向きな捉え方をすべき、という考え方を込めている。

このビジョンに基づいて、3つの重点政策を提案する。

- (1) 多様かつ新しい個性で、国内外から「選ばれる」まち
- (2) 潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち
- (3) 将来不安を払しょくする、志とチャレンジがあふれるまち

<sup>9</sup> 「習志野市シティセールスコンセプト BOOK 2<sup>nd</sup> (2020-2025)」(習志野市)、19頁

一つ目の「多様かつ新しい個性で、国内外から「選ばれる」まち」は、今後、ますます流動化していく世界において、人々の価値観や帰属意識は更に多様化していくことを想定し、そのような時代においても、「習志野市に住みたい、住み続けたい」と選ばれる街になるべき、という考え方である。選ばれるためには、多様な価値観に応える多様な個性、そして、常に変化する時代に応じて新しい個性を生み出し続けていける街になる必要がある。

二つ目の「潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち」は、「1. 現状」で示した習志野市の潜在性と強みを最大限に活かして、今住んでいる方、今後住む方が、この街で生涯を過ごしたいと思える環境を創っていくべき、という考え方である。都市の機能には「働く」「学ぶ」「遊ぶ」「暮らす」等があるが、東京都心や周辺都市と比べて、習志野市は「暮らす」機能に重点をおいてまちづくりを引き続き進めていくべきである。

最後の「将来不安を払しょくする、志とチャレンジがあふれるまち」は、日本社会に広がる将来不安に対し、国や他自治体から対策や成功モデルを示されることを待つのではなく、自ら「こういう街を創る」という志を抱き、様々な試行錯誤やチャレンジをしていくこと自体が重要という考え方である。不安を期待に変える、ピンチをチャンスに変えるためには、強い志、そして、新しいことを生み出すチャレンジが不可欠である。

### 3. 重点政策

「2. ビジョン」で示した3つの重点政策について具体的な内容を示す。

#### (1) 多様かつ新しい個性で、国内外から「選ばれる」まち

##### ① 過去の実績に加えて、教育と文化の新しい形を創り出す文教住宅都市

習志野市は、市制開始後、教育と文化に注力してまちづくりを進めてきた。特に、1970年に制定された文教住宅都市憲章は、習志野市の不変の理念として引き継がれてきている。しかし、この憲章を守ることが目的ではない。憲章で示された理念に基づいて、変化する時代に応じて憲章を具現化するまちづくりを進めていくことこそが重要である。憲章に基づいた政策の中に時代の変化に即していないものがあれば、抜本的に改廃すべきである。過去の実績は市制の土台として大事にしつつ、文教住宅都市憲章の理念に基づいて、常に新しい形の教育や文化を展開していくことによって、不安定な時代において「住んでみたい」と選ばれる街になる。

##### ② 歴史と伝統を活かしつつ、新たな伝統となる価値を生み出していく社会

過去の歴史、そして、伝統を大事にすることはまちづくりの基本である。一方で、過剰に歴史や伝統を重視すると、前例踏襲、思考停止となる危険性があるため、「常に新しい価値を生み出す」という姿勢が重要である。大きく変化する国内外の情勢において、「今までの伝統をどう活かすか」、そして、「時代の先を見据えてどのような新しい価値を創り出すか」、という思考が求められている。新しい価値を生み出すためには、行政のみならず、大学、企業、市民団体・NGO・NPO、市民等、様々な主体が自由に活動し、良い刺激を与え合う社会とする必要がある。世代として

は、変化に敏感で果敢な挑戦ができる若者世代が新しい価値を生み出す主役として期待される。

### ③「ごちゃまぜ」の住民参加型で、持続可能で新しい「公共」の創出

多様かつ新しい個性を大事にする街になるために、「行政サービスの受け手」という属性で区分する従来の手法から脱却すべきである。例えば、福祉の分野では、高齢者福祉、児童福祉、障がい者福祉が区分されて実施されてきているが、その区分を柔軟にすることで生まれてくる価値がある。岩沼市のJOCA 東北では、様々な福祉機能を一つの施設に集約して「ごちゃまぜ」をコンセプトとした運営をすることで、障がい者と高齢者、高齢者と幼児が交流し、お互いに生き甲斐、やりがい、幸せ、安心感を得る場になっている。年齢、障がい有無、国籍、性別等の区分ではなく、多様な人がごちゃまぜに交流し、その交流の中で持続可能な行政サービス、「公共」の新しいあり方を形作っていくことが求められている。

## (2) 潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち

### ①全世代が支え合いながら、超高齢社会を楽しむまち

超高齢社会では、高齢者は支えられる側、現役世代は支える側という区分は維持できない。高齢者の割合が増えていく中で、世代という区分ではなく、全ての人が互いに認め合い、分かち合い、支え合う社会にする必要がある。そのためには、「65歳以上は高齢者」という基準ではなく、心身が健康かどうかで判断し、健康な方は65歳以上であっても社会を支える側になっていただくことを推進すべきである。「高齢化社会」はネガティブな意味合いがあるが、「長生きして最後まで支え合って楽しむ」という捉え方をして、超高齢社会を楽しむまちづくりをしていく時である。

### ②自然を「守る」だけでなく、新たに生み出して共存する環境

高度経済成長時代の公害や環境破壊等によって、自然保全という考え方は広く浸透している。その結果、「保全＝守る」という発想が強く、人間と自然との共生という視点が欠けている。自然を守るだけでなく、人工的な川を自然化する、人工的な海辺に浜辺を設ける、谷津干潟での親水性を高める等、自然を新たに生み出し、育て、人間との共存、共生につなげるということが次の時代に必要である。

### ③羽田空港へのアクセスや京葉線沿線開発を活かす、「新習志野」の実現

習志野市の強みの一つとして、交通の便の良さ、特に、成田・羽田空港へのアクセスの良さがある。羽田空港の国際化と機能強化、同空港へのアクセス改善等を踏まえて、羽田空港へのアクセスのよい市南部の潜在性は高い。また、JR京葉線沿線は、南船橋駅周辺の再開発、幕張豊砂駅の開業及び発展、市川塩浜駅近くのレジャー施設及び人工干潟の構想等、新しい活気が生じている。これらの動きを踏まえて、習志野市としては、新習志野駅周辺を「第二のまちびらき」というべき大きな構想とともに再開発していくことによって、「新習志野」の名のとおり、市南部で新しい習志野を打ち出し、市全体のまちづくりを更に躍動させる好機である。

### (3) 将来不安を払しょくする、志とチャレンジがあふれるまち

#### ① 「市民協働」ではなく、「市民主導」による住民自治

習志野市は、市民協働基本方針に基づいて市民と協働してまちづくりを推進してきたが、今後は「市民主導」のまちづくり、真の住民自治を目指していくべきである。市民は「行政サービスのお客様」ではなく、「街づくりの主演・担い手」である。

価値観が多様化した時代においては、市民の求める多様な豊かさを行政が正確に見極めることは困難になる。よって、市民一人一人が生きがいや達成感を持ちながら生活できる街になるために、行政主導ではなく、市民主導のまちづくりが求められる。「自分たちのまちのルールは自分たちで決めていく」という住民主体のまちづくりを推進することで、住民の街への愛着は増し、その愛着がまちづくりの推進力となる。行政は、市民の活躍を下支えする環境を創り出し、住民自治が最大化することを目指していくことが求められている。

#### ② 社会実験を展開しながらアジャイルに変化する、柔軟なまちづくり

国内外の変化が激しい時代において、行政サービスの「賞味期限」は短くなっている。今まで以上に短い頻度で行政サービスを見直し、その改廃や更新をしていく必要がある。日本政府は、日本の行政には「無謬性神話」が存在し、問題先送りにつながり、結果として国民にとって不利益、という指摘<sup>10</sup>をしている。

そもそも変化の激しい時代に、全ての政策が成功することはないし、この点をサービスの受け手である市民も認識する必要がある。一方で、現状維持をするだけでは、時代の変化に応じて現状の行政サービスはすぐに陳腐化してしまう可能性が高い。よって、これから求められる行政は、時代の変化に応じて、社会実験を展開しながら、アジャイル<sup>11</sup>に変化する、柔軟なものである。変化自体をまちづくりの力としていく姿勢が求められている。人・物・財・情報が変化して新しい価値を生み出す舞台となる習志野市を目指すべきである。

#### ③ ピンチをチャンスにするプラットフォーマーとしての行政

日本は将来不安という大きなピンチに直面し、政治・経済・社会、あらゆる面で明るい未来を展望できず、過度に委縮してしまっている。そして、将来不安を払しょくする具体的な手段は誰もわかっていない。

しかし、「ピンチはチャンス」という言葉があるように、大きな課題をう

<sup>10</sup> 「アジャイル型政策形成・評価の在り方に関する ワーキンググループ 提言 ～行政の「無謬性神話」からの脱却に向けて～」(内閣官房行政改革推進本部事務局、令和4年5月31日、2024年11月15日20時25分、以下サイトをアクセス)

[https://www.gyokaku.go.jp/singi/gskaigi/agilewg/img/220531\\_setsume.pdf](https://www.gyokaku.go.jp/singi/gskaigi/agilewg/img/220531_setsume.pdf)

<sup>11</sup> アジャイルとは、元々はシステム開発の用語で、柔軟性と迅速な対応を重視した開発手法のことであり、最近では、ビジネスや行政においても注目されている概念である。

まく克服できれば大きな進展を期待できる。解決手段が見えない将来不安を打破するためには、多様な志とチャレンジが不可欠であり、行政はそれらを支える場となるべきである。自立的に街の将来像を描き、多くのチャレンジを繰り返す中で将来不安を払しょくする糸口が見えてくる。そのためには安心してチャレンジできる土台を創る必要があり、それは行政の役割である。

行政自身が直営で事業することを重視するのではなく、市全体を俯瞰して、市民、市民団体、大学、企業等、様々なまちづくりの担い手が積極的に活動していく場を生み出し、維持することがこれからの行政の主な役割である。行政がプラットフォーム（土台）のような存在となって、様々な活動を支え、促進し、成果発現につなげていく、というイメージである。

#### 4. 重点事業

3. で示した重点政策を強力に推進して成果を出していくために、重点事業を具体的に列記する。なお、時代の変化に臨機応変に応じるためには重点事業であっても常に見直し、必要に応じて改廃されていくべきものである。よって、以下に記載していない事業も、次期構想・計画の期間において、時代の変化に応じて次々に生み出されていくべき、と考えている。

##### (1) 多様かつ新しい個性で、国内外から「選ばれる」まち

- ① 日本式教育によるインターナショナルスクールの設置
- ② 義務教育の真の無償化、保育料の軽減
- ③ 小学校のコミュニティ・スクール化の深化（小学校を中心とした、スクール・コミュニティへ）
- ④ 市立習志野高校の更なる充実（文武両道）、中高一貫校化
- ⑤ 特別支援学校中学部・高等部の設立
- ⑥ 日常に文化（音楽、芸術、スポーツ等）の薫る「みち」・まちづくり
- ⑦ 外国人定住促進策を含む多様な共生社会の推進（外国籍児童の受入れ支援、「大切な人を守る都市宣言」の実践、ユニバーサルデザインの普及）
- ⑧ 教育・医療・介護・防災等、あらゆる分野で「習志野発」の取組を創造し発信、新しい価値を創造することを重視する行政
  - 既存制度の隙間に落ちているような市民ニーズへの市独自策の実施
- ⑨ 市内にある3大学の個性を活かした連携事業の積極的な展開
  - 千葉工業大学のロボット・宇宙工学
  - 東邦大学の薬学・健康科学
  - 日本大学の生産工学
- ⑩ 若者による創業・スタートアップ支援、社会起業家の育成
  - 大学生または卒業後10年以内の期間限定での公的支援（補助金、店舗契約支援、団地を活用した住居支援）
- ⑪ 市民提案型の地域産品の創出

- ⑫ 国籍・年齢・性別・障がい有無・官民等の垣根を越えて「ごちゃまぜ」で交流する公共施設の設置
- ⑬ 「直営か民間委託か」の二択ではない、新しい「公共」サービス手法の模索と実践

## (2) 潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち

- ① 福祉基準の見直し（高齢者の定義変更、「年齢」から「困窮状態」に基準を変更）
- ② 地域活動、特に新しい地域活動（プレーパーク、マルシェ、子ども食堂、無料学習塾等）への支援の抜本的拡充（補助金のみならず、コーディネートを行う専門職の配置等）
- ③ スポーツ×健康づくり×まちづくりの実践
- ④ ハミングロードの再活性化（都市計画道路3・3・3号藤崎茜浜線の完成を契機として）
  - 歩きやすい道となるための再整備
  - フリーマーケットの実施
  - 屋台、移動式カフェ等の展開
- ⑤ 親水性の促進（茜浜・芝園の海辺、谷津干潟、菊田川）により「生きがいと学び」の場となる水辺の創造
  - 親水性が高く、にぎわいの場となる海辺（浜辺、カフェ、レストラン、BBQ場、釣り桟橋等）
  - 水や生き物と日常的に触れ合える谷津干潟
  - 習志野市最後の船溜（谷津船溜）を親水公園へ
  - 菊田川におけるミズベリング<sup>12</sup>（カヤック、SUP、カフェ、フリーマーケット、屋台、花見イベント等）
- ⑥ 激甚化・頻発化する自然災害、気候変動の影響に強いまちづくり
- ⑦ 新習志野駅周辺の「第二のまちびらき」（駅南北を一体的に捉えた開発）
  - 物流拠点からの脱却、高度技術産業の集積のために税制等のインセンティブ付与
  - 駅周辺への集合住宅の建設（地区計画の変更）
  - 菊田川沿いのかわまちづくり・ミズベリング
  - 茜浜近隣公園予定地を地元スポーツチームの拠点へ
  - 千葉工業大学と連携したスタートアップ支援（宇宙・ロボット産業等）
  - 茜浜から幕張までの地域（道路・歩道が広く平坦な特徴がある地域）を千葉市と連携して「大きな公園」としてランニング、サイク

<sup>12</sup> 新しい水辺の活用の可能性を切り拓くための官民一体の協働のプロジェクト  
 （2024年11月18日22時16分、以下サイトをアクセス）  
<https://mizbering.jp/>

リング、BBQ等を楽しめる地域へ

- 新習志野駅周辺の地域を新しい交通手段（セグウェイ、電動キックボード、スローモビリティ、自動運転バス等）の実証実験エリアへ

### (3) 将来不安を払しょくする、志とチャレンジのあふれるまち

- ① まちづくり会議の抜本的な拡充
  - 一定の予算権限の委譲
  - 市民公募型・専任職員（まちづくりコーディネーター（仮称）職の設置）の配置による熟議の深化（熟議型民主主義手法の活用）等
  - まちづくりルール（仮称）の設定権限の付与（自分たちのまちのルールは自分たちで創る）
  - 熟議型民主主義手法の活用
- ② 市民参加型事業の抜本的拡充
- ③ 市民活動を支援する中間支援組織の設立
- ④ 習志野市の未来をみんなで考える「シンクタンク・ならしの」（仮称）の設立
- ⑤ 市役所職員の専門性を見直しと強化（地域資源活用、インフラ維持、総合マネジメント等）
- ⑥ 公共施設再生の見直し、新たな投資による若い世代の流入促進
- ⑦ 市民・企業提案型の社会実験事業の展開
- ⑧ 都市計画の全面的な見直し（住工分離地域の区分見直し等）
- ⑨ 京成各駅（谷津、津田沼、大久保、実籾）の駅前空間の充実、京成線沿線の自治体との連携による駅中心のまちづくり
- ⑩ 試行錯誤を許容する行政文化の定着
- ⑪ 新規条例の制定時における改正検討時期の明文化（常に見直す姿勢の制度化）
- ⑫ 習志野市外に住む「習志野好き」を惹きつける関係人口増加策

## 5. 終わりに

不安定で見通しの立たない世界、そして、将来不安に覆われている日本において、国家運営やまちづくりの具体的な「正解」を示すことはできない。逆に言えば、そのような「正解」を見いだせないために、日本も世界も不安定な時代になっている。この時代において、委縮して困難な時代が過ぎ去ることをじっと待つ姿勢ではなく、自主的かつ総合的な<sup>13</sup>視点をもって積極的なまちづくりを進めていく中で、豊かな未来に向けた糸口が見えてくる、と強く信じる。このような想いから、「ワクワク」、「志」、「チャレンジ」といったやや情緒的な言葉をあえて本提言では用いてきた。答えのない時代に怯えるのではなく、楽しみながら挑戦していく姿勢が極めて重要である。

<sup>13</sup> 「地方公共団体は、住民の福祉の増進を図ることを基本として、地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を広く担うものとする。」（地方自治法第1条の2）

歴史を省みれば、明治維新と第二次世界大戦後の復興において、日本人は果敢な挑戦を繰り返すことで国創りを成功させてきた。一方、明治維新においては「脱亜入欧」という言葉のように欧米のようになりたいという思考、第二次世界大戦後の復興においては米国追従という思考が強く、自主性という点では課題が大きかった。また、明治維新よりも前の時代では、どの時代においても中国の国家運営や思想が大きな影響を日本にもたらしていた。

しかし、今、かつて日本が追いつこうとした欧米も国家運営の方向性が不透明となっており、日本が追うべき、または、追いつきたいというモデルは世界のどこにも存在しない。やや大仰に言えば、今こそ、日本が史上初めて自主的で独創的な国家運営、まちづくりを進めていく必要がある。

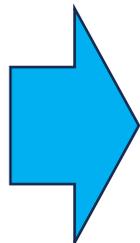
このような時代認識に基づいてこの提言を作成した。予測困難な時代において、どこの自治体でも使用できるような基本構想では無意味である。未来を「予測」しようとする姿勢ではなく、自らの個性と強みを使って未来を「拓く」姿勢が求められている。現在策定中の次期構想・計画が、習志野市の個性と強みに基づいて、みんなで豊かな未来を拓いていく、ワクワクする街を創っていくことにつながるものとなることを強く願って、この提言を終える。

以上

# ビジョン：みんなで豊かな未来を拓く、ワクワクする習志野へ

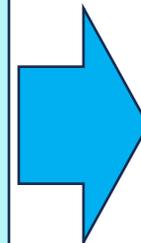
## 現状

**世界**：不安定・見通し悪し  
**日本**：長期停滞・将来不安  
**習志野市**：人口・財政での相対的な強み、進取の気風、文教住宅都市憲章



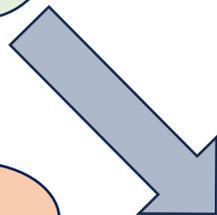
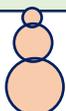
## 重点政策

1. 多様かつ新しい個性で、国内外から「選ばれる」まち
2. 潜在性と強みを活かして、いつまでも暮らしやすいまち
3. 将来不安を払しょくする、志とチャレンジがあふれるまち



## 目指したい将来

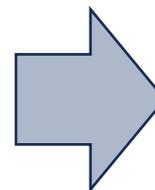
豊かな未来  
 ワクワクするまち  
 ↓  
**持続可能なまち**



国づくり、まちづくりの成功モデルはなく、自らチャレンジし、模索の連続あるのみ！

## 【ネガティブシナリオ】

- ・強みと個性を活かさない、抽象的なビジョンや政策
- ・見通しの立たない時代に、チャレンジのないまちづくり
- ・前例踏襲、横並びの政策



## 避けたい将来

自立できないまち  
 人が流出するまち  
 ↓  
**消滅自治体**